

日本国際飢餓対策機構 年次報告 2006.7-2007.6

飢餓が原因で、1分間に17人が亡くなっています。
12人は子どもです。



Japan International Food for the Hungry

大 阪 〒581-0032 八尾市弓削町 3-74-1
TEL 072-920-2225 FAX 072-920-2155
東 京 〒164-0012 中野区本町 5-10-5
TEL 03-3383-7611 FAX 03-3383-7510
愛 知 〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 2F
TEL 052-731-8111 FAX 052-731-8114
広 島 〒731-0103 広島市安佐南区緑井 2-21-23 201号
TEL / FAX 082-831-1214
沖 縄 〒900-0033 那覇市久米 2-11-20
TEL 098-868-6347 FAX 098-868-6360

■発行 堀内 顕
■発行 日本国際飢餓対策機構
■郵便 00170-9-68590 / 日本国際飢餓対策機構
※支援金は随時受け付けております。

<http://www.jifh.org/>



善い隣り人になって共に生きよう地球家族

飢餓対策ニュース 2007.11 No.208

目 次

■ 海外活動

緊急援助から復興支援へ

ジャワ島地震・被災者支援 4

能登半島沖地震・被災者支援 5

自立開発協力

カンボジア／地域開発プログラム 6

バングラデシュ／栄養不良への地道な取り組み 8

ウガンダ／少女たちの顔に戻った笑顔 9

ペルー／心も体も健やかな生活を目指して 10

中国／最も楽しいことは勉強すること 11

世界里親会 子どもたちと共に未来を目指して 12

海外駐在員派遣 「人づくり」に関わるものとして 14

オリエンテーション・トレーニング 16

海外ワーク・キャンプ 17

■ 国内活動

講演会、巡回活動 18

すべての人々に食料を～世界食料デーの取り組み～ 19

愛知事務所を開設／親善大使の働き 20

募金活動／今からできる国際協力 21

視聴覚教材（ビデオ・パネル・国際児童画・書籍他） 22

■ 支援活動一覧 24

■ 決算報告 26

■ 監査・支援者数 27

■ パートナー 28

■ 年間活動記録 29

■ 日本国際飢餓対策機構とは 30

ごあいさつ

飢餓と貧困に苦しむ人々への、皆様の温かく豊かな愛のこもった支援金を、私ども日本国際飢餓対策機構に昨年度も託していただき、また皆様の愛の働きの手足として、私ども奉仕できましたことを心より喜んでいます。

今夏はこの日本でも異常気象ともいえる酷暑が続きましたが、世界規模では干ばつ・洪水・地震などの自然災害が多発し、人が生きる困難を感じる状況が続いております。現在も世界では、飢餓で苦しむ人々が8億5400万人もおります。しかし、日本を始めとする工業先進国に目を向けますと、相変わらずの大量生産、大量消費、大量破棄の日常が繰り返されています。驚くことに肥満人口が10億人を数え、飢餓人口を超えたとの報告もあり、美食への浪費とダイエットへの多額の投資の実態が見えてきます。

「自分さえよければ」そんな身勝手な生き方から転じて、皆様と共に「善き隣人」となって、持てるものを分かち合い、飢餓や貧困に苦しむ人々と共に生きる社会を築き、世界の飢餓問題の解決に向けて更に邁進^{まい}していくことが私どもの使命と確信しております。

心からの感謝を持って、ここにこの1年の活動報告をお届けいたします。この一つ一つは皆様の温かいご支援とご指導、また愛の結実です。飢餓と貧困との闘いはこれからも続いてまいります。新年度も皆様！共に考え、共に勇気付けられ、共に行動してまいりましょう。

皆様の祝福、ご健勝と平安を祈りつつ。

日本国際飢餓対策機構 理事長 堀内 顕

この数年、世界中で大規模災害（地震、津波、洪水、干ばつ等）が、頻発するようになりました。もともと脆弱なインフラしかない開発途上国においての災害は、私たちが考える以上に長期的な影響を現地の人々に与えます。その故に1年後、2年後の復興支援が重要であり、迅速な緊急支援と共に、真の復興の鍵となります。

□ ジャワ島地震・被災者支援

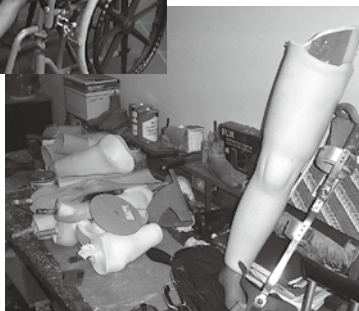
2006年5月27日、インドネシア・ジャワ島中部で大地震が発生し、死者6,000人以上、負傷者4万人以上にのぼる被害となりました。そのなかで約2千人の方々が、地震によって身体的障害を負ったと報告されています。

日本国際飢餓対策機構は地震後の6～8月に、清家弘久、酒井保・両スタッフを派遣し、現地NGO「ラブ・ジョグジャ」を通してシェルターボックスの配布、仮設住宅の建設を支援させていただくと共に、同年11月からは、現地NGOのYAKKUM（ヤックム）が運営するヤックム・リハビリセンター（YRC）を通して、6名の脊椎損傷患者の方々の支援させていただきました。YRCとの関わりは、酒井スタッフが、11月にジャワ島で開催された「現地NGO復興支援会議」に参加し、その際に支援要請を受けたことから始まります。

これからも現地NGOとより良い協力を結びながら、迅速に、かつ現地の必要に即した働きを行っていきます。



リハビリ中の子どもたち（YRCにて）



YRCで作られる義手や義足

□ 能登半島沖地震・被災者支援

○第1期：2007年3月28日～4月12日

2007年3月25日、能登半島沖にて震度6強の地震が発生。人的被害が奇跡的に少なかったことは幸いでしたが、多くの建物に損壊が発生しました。

日本国際飢餓対策機構は、協力団体のひとつである門前聖書教会を拠点に、県内外からボランティアの方々の協力を得て、壊れた家財や瓦礫の撤去、物資の運搬や整理を行わせていただきました。

○第2期：5月19日～20日 復興支援コンサート

初期の支援活動を展開していくなかで、特に住居を失った高齢者の方々の励まそうという声が、被災者の方々からも起こり、当機構の親善大使であり、阪神大震災で弟さんを亡くされた福音歌手・森祐理さんによるコンサート「希望の翼コンサート～いのちの喜びかみしめて～」が企画・実施されました。両日あわせて、3ヶ所230名の方々が来会してくださいました。



壊れた蔵から家財を取り出すボランティア（門前町）



「希望の翼コンサート」の様子（もんぜん児童館にて）

「人々が自信を持って、生活を支えていく事ができる、そして、人々がお互いの必要に対して共に助け合うことができる」そのようなコミュニティを実現していくことを目指して、この1年も支援させて頂きました。

カンボジア・カンボット 地域開発プログラム

カンボジア南西部カンボット州チューク地区における働きが、2007年7月に終了し、地域の人々に委ねられました。

この働きは1993年、内戦終結後の混乱の中、緊急援助的な要素も含めた井戸掘りプロジェクトから始まりました。やがて地域での問題や必要に合わせ、人々の持つ潜在能力を伸ばし、村人が主体となる働きへ変化してきました。農業、教育(世界里親会)、リーダー育成、保健衛生の働きを通して、村の中に目に見える変化がもたらされました。

最後の数年間は、外部からの支援に対する依存を増大させないために、村人中心の活動に切り替え、スタッフの役割を徐々に村の人々に委ねてきました。ある地域では村長が呼びかけて、村人たちが中心となってダム・水路建設が行われるなど、様々な課題や必要などに対して、計画・実行できるようになりました。

チュークでの国際飢餓対策機構の働きは終了いたしますが、その働きは、地域の人へと受け継がれ、さらに大きく前進していくと信じています。

* 2007年2月から、カンボジア北部オドー・メンチェイ州での働きが始まっています。



リーダーの方々のミーティングにて(チューク地区)

14年に及ぶ活動を地域に委ねる時

元カンボジア駐在スタッフ
木村力央(2007年3月に帰国)

活動地のひとつトロピアン・ルーク村の変化をご報告いたします。以前この村ではほとんどの家庭で、米の収穫が1年のうち6ヶ月以上不足していました。しかし現在は80%の家庭で、1年間十分に食べる米が確保できています。また井戸^{りかんりつ}の設置と保健衛生教育の効果で、子どもの腸チフス罹患率が激減(50%から3%へ)しました。世界里親会の働きを通して、小学校就学率は100%となりました。

しかし、このように目に見える物理的な変化よりも大切なことは、人々の価値観の変革です。2005年、外部団体に活動評価を依頼した際、「人々は将来について希望をもって考えられるようになった」との評価をもらいました。内戦等の結果、運命論的な考えが支配的であったカンボジアでは、これはとても大きな前進です。また同年、団体の内部評価において、「村のリーダーたちが協力して地域の問題を解決している」ことが顕著に現れました。これも、ポル・ポト統治時の虐殺の結果、人間関係が崩壊してしまったカンボジアにおいて、特筆すべきことです。このような価値観の変革が、村・地域レベルで「勢い」として見受けられた頃、「これならこのチューク地区での活動を終了できる」と考えるようになりました。

(飢餓対策ニュース198号2007年1月号より抜粋)



スタッフ・ミーティングで話す木村スタッフ

栄養不良への地道な取り組み

バングラデシュの首都ダッカにあるシシュ・ホスピタルは、極度の栄養不良の子どもたちが無料で治療が受けられる施設です。今年もその栄養失調病棟を支援すると共に、病院に併設する「小児治癒センター」を運営・支援しました。

2006 年も、シシュ・ホスピタルの栄養失調病棟に入院する 700 人以上の子どもたちを支援する事ができました。特に今年度からは新しく、サラセミア（地中海貧血／遺伝性の病気で赤血球内のヘモグロビン《血色素》の合成障害によって貧血となる）と呼ばれる血液疾患となった子どもたちを助ける働きも始めました。

加えて、退院後も通院する必要のある子どもたちとその家族の宿泊施設として、「小児治癒センター」を運営しました。バングラデシュにおける栄養不良の主な原因のひとつは、母親たちの「栄養知識の欠如」にあります。センターでは、滞在する母親たちに「限られた収入の中でいかにバランスの良い食事を用意するか」といった栄養に関する知識を提供しています。今年度は、136 人の母親を対象に、栄養の学びを行うことができました。

日本国際飢餓対策機構は 20 年以上、シシュ・ホスピタルを支援してきました。その 20 年の間に、5 歳未満児の死亡率はバングラデシュ国内で 3 分の 1 に減少しました。死亡率を左右するといわれる栄養不良への取り組みの結果が、このように目に見えてきていることを感謝します。



小児治癒センターに入寮中の母子

少女たちの顔に戻った笑顔

ウガンダ北部キトゥグム県では、1986 年以降、反政府集団 LRA によって、2 万人に上ると言われる子どもたちが拉致されました。少年は兵士に、少女は兵士の「妻」とさせられました。そこから逃れてきた子どもたちの、社会復帰のためのリハビリ施設として、ニューライフ・センターがスタートしています。

ニューライフ・センターは、特に、子どもを抱えて生きていかねばならない少女たちのためのリハビリ施設です。12 週間を 1 コースとし、2007 年 2 月に最初の 19 名が入所しました。少女たちは読み書きを習い、職業訓練に参加します。また少女たちのトラウマや自殺願望は、カウンセリングによって改善に向かい、幾人かは新しい人生の一步を踏み出そうとしています。

「数年間忘れていた、心からの笑顔を思い出しました。ありがとう」。コースを終えたマリーさんの一言です。マリーさんは 11 歳の時に拉致され、そして兵士の妻とされ、2 人の子どもを生みましたが、既に母親は殺され、父親は再婚していました。家に彼女の居場所はなく、絶望のゆえに、自殺を図るほどでした。そのような時、コースに参加し、彼女の心は徐々に癒され、将来に対して希望を持って踏み出すことができるようになりました。

一人でも多くの少女の心に平和が訪れることを願います。



識字教室で勉強中の少女たち
(ニューライフ・センターにて)

心も体も健やかな生活を目指して

ペルー東部アマゾン流域のプカルバにおいて、世界里親会との協力のもとに、心身共に健やかな生活を目指して、人々が「保健衛生」の課題に取り組んでいます。

プカルバは、近隣の山岳地帯やジャングル地域からより良い生活を求めて移り住んできた人々の開拓地です。しかし安全な水の供給が不足していること、下水処理の問題などにより、予防できるはずの様々な感染症に苦しんでいました。

ボランティアで構成される保健衛生プロモーターは保健衛生について学んだことを、家庭訪問などを通して、隣人に分かち合っています。中でも60人前後の学生たちによるプロモーターは、寸劇やパンフレット、ゲームなどを用いて、より効果的に他の生徒たちへ伝える工夫を積み重ねています。

また「病気予防」「寄生虫」「栄養」「救急法」などのテーマで訓練会も行われ、特に「栄養」の訓練会では「バランスの取れた食事コンテスト」が開かれ、参加者は身の回りにある食材を用いて、工夫を凝らした食事を用意し競い合いました。

2007年末、プカルバ地域での働きは終了します。上記のように現地では、ボランティアが中心となって、コミュニティの保健衛生の問題について自発的な取り組みがなされ、現地の人々へその働きが受け継がれる準備が整っています。



保健衛生の問題を寸劇で他の生徒に伝える子どもたち
プカルバ

最も楽しいことは勉強すること

雲南省の最北地域・ディーチン・チベット族自治州の州都シャングリラにある民族中学校。ここに併設されている「英語訓練センター」は、民族中学校で学ぶ生徒の奨学金プログラムを支えるために、当機構との協力で運営されています。

2006年、毎年恒例の英語訓練センターでの夏期英語コースには、市内だけでなく山岳地域の中学から計60名の学生が参加しました。また2007年1月には冬期コースが初めて開催され、朝晩氷点下10度前後にまで下がる冬の厳しい寒さにもかかわらず、20名が参加しました。センターのこれら活動の収益は、民族中学で学ぶ生徒たちの奨学金となり、2007年は26名の生徒が支援されています。

生徒たちは皆、家庭が貧しいゆえに、学校に行きたくても行けない生徒たちです。そのため、このチャンスを生かして必死で勉強しています。勉強の機会を与えられたことによって、生徒たちの心に灯された希望の灯が、将来へと繋がっていくことを願って活動が続けられています。

「私は今、全ての思いを学びに賭けています。学びは決して容易ではありませんが、最も楽しいことです。私はこの機会を大切に、一生懸命勉強しています」(中学2年生・女子)



夏期英語コースの様子(シャングリラ)



子どもたちと共に未来を目指して

世界里親会は、全国の里親の方々と共に、開発途上国で貧しさゆえに学校に続けて通うことのできない子どもたちを対象に、教育、健康診断、将来の自立を助ける職業訓練など、その全人的成長を助ける活動をしています。現在、7ヶ国で働きが進められています。

モザンビーク

活動地域：マロメウ地区ヴィラ

女性にも地域の発展にもっと関心を持ってもらうため、意識して女性の看護師、教師、宣教師などをコミュニティに受け入れたところ、学校で、女子生徒の学ぶ態度に意欲ができました。2007年12月末で支援が終了します。

ウガンダ

活動地域：ブンタバ、ナマスンビ、キョガ、ミソンバ

子どもたちにより良い教育を提供するため、評判の良い学校などから教師に集ってもらい、里子の通う学校の授業参観をしてもらいました。授業後、教師同士でディスカッションを行い、教授法などについてアドバイスを受けました。



ペルー

活動地域：リマ（ビジャ・ドス・デ・エネーロ）、プカルパ（ロス・プロセレス）

健康、家族との関わり、リーダーシップの成長など、様々な面においてプログラムが行われました。現在2007年12月末の支援終了にむけて、準備真っ最中です。

ボリビア

活動地域：チャヤ

新しい地区で、特に小さな子どもに焦点を当てた教育支援活動が始まる予定です。

バングラデシュ

活動地域：ダッカ、マイメンシン（リシパラ、ハリジャンパリ）

2006年11月の進級試験では、初等科の里子92%、中・高等科の里子73%が合格するという良い結果が出ました。子どもたちに意欲が出てきたこと、教育を受けることの大切さを理解する大人が増えてきたことを現地スタッフは実感しています。

フィリピン

活動地域：マニラ近郊地区（フェアビュー、パリパラ、ビッグバナナ）

2007年5月に、フェアビュー地区で世界里親会の働きが終了しました。支援終了の記念式では、子どもたちはじめ保護者、地元リーダーたちによる世界里親会との思い出が語られました。里親の方々の長年にわたるご支援に感謝いたします。

カンボジア

活動地域：カンボット州チューク地区（クレイン・モデン、トロピアン・ルーク）、オドー・メンチェイ州アンロンベン郡

2007年7月末でチューク地区での支援活動が終了しました。そのチューク地区を同年3月下旬、10名の里親の方々が訪問されました。国際飢餓対策機構カンボジアは、国境に近い北部のアンロンベン郡に活動拠点を移しました。

カンボジア・チューク地区で支援終了！

地区の学校長ブリアップ・ソパールさんの言葉

「この地域は以前『どろぼう村』と呼ばれていました。しかし今は、他の村々の見本になっています！また、98%の子どもが小学校を卒業し、45%が中学校、15%が高校を卒業するようになりました。国際飢餓対策機構は去っていきますが、私のこの地域はこれからも発展し続けていくことを約束します」。

里子訪問するスタッフ（チューク地区）



海外駐在員派遣

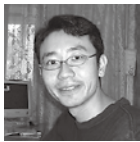


「人づくり」に関わるものとして

飢餓、貧しさのなかに生きる人々が自立への努力を続けていくためには、よきファシリテーター（心に灯火を灯す人）が必要です。日本国際飢餓対策機構の海外スタッフは、現地でファシリテーターとなって、最前線で「人づくり」に取り組む人々です。今年も皆さんとチームとなって働くことができ、心から感謝いたします。

回 帰国スタッフ

★小崎敏志（ウズベキスタン／世界里親会コーディネーター）



2003年1月～2006年10月帰国

ウズベキスタン・ピスケント地域の里親会コーディネーター、クムシュカンにおける農業実習学校でコンピュータトレーニングなどを行いました。

★浜名基弘・マリヤ（カンボジア／プロジェクト評価・世界里親会アドバイザー）



2004年1月～2007年3月帰国（※1998年～2003年までフィリピン）

カンボジアのプノンペンとチューク地区において「人づくり」評価ならびに世界里親会アドバイザーとして働きました。

★木村力央・志保（カンボジア／カンボジア事務所・統括責任者）



1997年1月～2007年4月帰国

足掛け11年にわたるカンボジアでの働きを終え、帰国。後半は国際飢餓対策機構カンボジア全体の責任者として、地域とスタッフ育成・指導のために働きました。

回 新着任スタッフ

★島 幸晴（バングラデシュ／2006年7月出発）

マイメンシンにて開発アドバイザー



★竹内 緑（ルワンダ／2006年9月出発）

キガリにて「子どもだけの家族」支援プログラムの推進。



★小西小百合（ボリビア／2006年11月出発）

コチャバンバを拠点に世界里親会コーディネーター



◇ 2007年7月以降派遣スタッフ

齊藤 満（カンボジア／2008年1月予定）

子どもたちと農業に取り組む

ボリビア駐在スタッフ 河合朝子

河合スタッフ



プロジェクト2年目となる今年、子どもたちのやる気や興味をどう引き出していくかを、何度も何度も考えさせられました。

プロジェクト1年目の昨年、温室野菜の管理や動物（クイ）の世話など、本来は寮の子どもたちが取り組むべき仕事に私たちが手を出しすぎたため、子どもたちが「これは国際飢餓対策機構の活動」という認識を持ってしまいました。「これではいけない」と、今年は初めから学校寮長と子どもたちに管理を委ね、私たちは時々作業の指示をする程度にしました。すると子どもたちが働かず、野菜の生産量が去年の半分になってしまいました。

「子どもたちが責任を持って取り組めるような組織作りをしなければ！」と、今度は彼らをグループに分けて担当を決めると共に、月の終わりにはミーティングを持ち、彼らが作業を通して思ったことや疑問、やってみたいこと等を話し合うようにしました。するとだんだん野菜の生産量も回復していきました。

また通学してくる生徒たちには、自分の家でクイを飼育してみるように勧めました。どんな反応があるか心配でしたが、彼らは自分で小屋を作り、自分のお財布からお金を出してクイを買いました。結局、ほとんどのクイが犬に襲われたりして死んでしまったのですが、生徒たちが学校で学んだことを実践できたことは嬉しいことでした。それを見ていた学校寮生の一人が、「僕も実家にクイの小屋を作ったよ」と言うので行ってみると、工夫を凝らした小屋がありました。彼も、自分でクイを買って、飼育していたのです。



子どもたちが飼育するクイ

（「支援者への手紙」より／2007年1月）

海外で奉仕を目指す人のために

「活動地において現地の人々と共に生活しながら奉仕がしたい」あるいは「飢餓問題について深く学びたい」と願っておられる方々のためのトレーニングです。毎年、春と夏の2回、開催されています。

【第23回】

2006年8月7日(月)～12日(土)
グレース宣教会・紀勢会堂(三重県)
参加者：8名

【第24回】

2007年3月26日(月)～31日(土)
東京キリスト教学園(千葉県)
参加者：16名



トレーニングでは「飢餓の現状」開発とは「活動理念」「緊急援助理念」「海外スタップになるための準備・活動地での生活」など、多岐に渡る学びを行います。



見て、聞いて、体験して

フィリピン・ワークキャンプ

日程：8月1日(火)～12日(土)

参加者：12名

場所：マニラ郊外バリバラン地区

内容：バスケットコート作り、
学校訪問など



ペルー・ワークキャンプ

日程：8月18日(金)～31日(木)

参加者：9名

場所：プカルバ市ロス・プロセレス地区

内容：公園整備



ウガンダ・ワークキャンプ

日程：8月15日(火)～29日(火)

参加者：9名

場所：ムコノ県キョガ地域

内容：学校建設



参加者の声

大竹真理枝(ウガンダ・ワークキャンプ/大学生)

実際に行ってみなければわからない、様々なことを感じました。貧しさの中での子どもたちの笑顔、どのくらい濁った水を飲料水として飲んでいるか、水を運ぶことがどれだけ大変か、生活用水が限られていることの大変さ、両親がいない孤独な子どもたち、病気と孤独の中で死んでいく人々、日本がいかにも物質的に恵まれているか、私が思う「辛いこと」は目の前にいる人々のそれに比べればいかにちっぽけなことか。

帰国後、決意したことが3つあります。それは伝える事、行動する事、祈る事です。そのひとつ「祈る」とは、毎日、ウガンダの子どもたち、地域の人々、現状問題などを思い起こし、肉体面、精神面における人々の必要を願うことです。普段の生活に忙殺されそうになっても、関心を持つことをやめないで絶えず祈っていきたいと思います。



講演会・巡回活動

顔と顔の見える報告を！

近年、インターネット等の著しい発達と簡便化により、誰でもどこでも、世界中の情報を瞬く間に手に入れることが可能になりました。そのような中でも、年間を通して、日本全国の方々からお声をかけていただき、飢餓啓発の機会をいただくことができました。

日本国際飢餓対策機構は、今年度も延べ 453 回（集会 341 回、学校講演 112 回）の集会を行わせていただき、延べ出席人数 38,843 人の参加をいただきました。これは、飢餓・貧困という世界の問題に多くの方々に関心を寄せてくださり、それを講演・現地報告というスタイルで、直にスタッフを通して聴くことに大きな意味と価値を感じてくださっていることかと思えます。一度話を聞いて下さった方が、何回も集会に参加して下さいたり、他の方に紹介して下さいたりという広がりがあることはとても嬉しいことです。また近くで講演会がある際には、是非お出かけ下さい。



学校講演にてワークショップ



イベントへの参加



国際児童画展（登別大会にて）

現地報告を行う
吉田真記スタッフ④と
河合朝子スタッフ⑤子どもたちにも飢餓について伝える
（奈良大会にて）

すべての人々に食料を！

～世界食料デーの取り組み～

国連が提唱する「世界食料デー（10月16日）」。当機構では、その趣旨に賛同し、1982年から、講演や現地報告、一食募金の呼びかけなどを通して、飢餓啓発の活動を行ってきました。昨年の大会協力者数は 54,064 人、支援金総額は 19,687,224 円となりました。

昨年「世界食料デー大会」として取り組んでくださった方々は 25 大会となり、全国で 3,652 人が会場に足を運んでくださいました。

その中で、20 周年を迎えました世界食料デー沖縄大会は 9 月 16 日（土）、沖縄市民会館にて記念大会を開催しました。台風 13 号接近の中での開催となりましたが、約 350 人の来場者がありました。大会一部では 20 年の歩みを振り返るスライド上映、沖縄出身で当機構の親善大使でもある上原令子さんによる歌、二部では沖縄芝居芸人の北島角子（きたじますみこ）さんのウチナーグチ（沖縄方言）による一人芝居“赤いぶくぶく”（沖縄戦を経験し生き残った老婆による語り）が上演され、平和の尊さを考えました。当機構からは堀内顕理事長、辻本清臣、神田英輔も出席し、共に 20 年の歩みを感謝しました。



一人芝居を行う北島角子さん



よろしく！愛知事務所です

2006年12月1日から中部地区の拠点として、東京、大阪、沖縄、広島に続き、愛知事務所を開設しました。清家弘久総主事が常駐スタッフとして働いております。

中部地区で、長年にわたり応援くださってきた方々に加えて、2005年「愛・地球博」地球市民村への出展を通して広がった愛知近隣での支援の輪を、さらに盛りたてていきたいと願っています。中部地区の皆様と共に、協力者の方々と共に（左端：清家スタッフ）飢餓に苦しむ方々への支援を続けさせていただけますことを感謝いたします！



♪歌を通して世界をつなぐ～親善大使の働き～

当機構の親善大使として、ゴスペルシンガーの上原令子さん（2004年7月から）と森祐理さん（2006年4月から）のお二人が、歌を通しての飢餓啓発に取り組んでくださっています。

上原令子さんはこの一年、親善大使として15回のコンサートで私たちの働きをアピールしてくださり、世界食料デー大会でも2回の奉仕をしてくださいました。

森祐理さんはご自分のコンサートや講演活動を通して、積極的なアピールを行ってくださいました。2007年5月19日～20日には、能登半島沖地震・被災者支援「希望の翼コンサート～いのちの喜びかみしめて～」に出演。被災者の方々へ、歌による励ましのメッセージを届けてくださいました。

森祐理さん



上原令子さん

募金活動

今からできる国際協力

◆ 会社、お店に、あるいはご家庭に募金箱を！

【地球型募金箱】

地球型募金箱は、会社やお店、病院、学校など公共の場に置いていただくためのものです。集められた募金は「子どもの医療活動のため」に用いられてきました。

※2008年1月からは「飢餓と貧困に苦しむ方々のため（一般寄付）」として用いさせていただきます。



地球型募金箱（中央）とミニ・ラブング（左）、ラブング募金箱（右）

【ラブング募金箱】

牛乳パックの形をした「ラブング（Love…ing）募金箱」は、ご家庭や個人で使っていただける募金箱です。昨年度から一回り小さな「ミニ・ラブング」も登場。共に葉祥明さんの美しいイラストです。

◆ 書き損じハガキ収集

お送りいただいた書き損じハガキは、海外スタッフ派遣のために用いさせていただいています。今年度も以下のように、多くのご協力をいただきました。心より感謝をいたします！

・書き損じハガキ収集枚数（2006年7月～2007年6月末）
12,458枚（517,496円）

◆ ホームページ

阪神淡路大震災を契機に1995年に開設しました。当時は、アクセスは少なかったのですが、現在は一日に120～300件のアクセスがあります。多くの方々に必要な情報を提供すべく、逐次更新・新設を行なっています。ホームページを通しての問い合わせや申し込みも多く、迅速な対応に努めております。

なおホームページ・アドレスとEメール・アドレスは、2007年7月から以下に変更となっております。ご注意ください。

★ホームページ・アドレス <http://www.jifh.org/>

★Eメール・アドレス general@jifh.org

<http://www.jifh.org/>

学校や家庭でご利用下さい

視聴覚教材(ビデオ・パネル・児童画)の貸し出しは無料ですが、往復の送料のみご負担いただいております。貸し出し期間はビデオは2週間、パネル・児童画についてはご相談下さい。

◆ 貸し出しビデオ



★ 飢餓問題について知りたい方へ

隣り人の叫び (16分 / 小学校高学年以上 / 1986年 / 文部省選定)

南のおともだちのために (16分 / 幼稚園以上 / 1990年 / 文部省選定)

世界の子どもたち (7分 / 幼稚園以上 / 2003年)

★ 各国での自立開発協力活動について知りたい方へ

共に生きる (18分 / 小学校高学年以上 / 1988年 / 文部省選定)

極貧のアンデスから (20分 / 小学校高学年以上 / 1990年 / 文部省選定)

翔べアンデスの子よ (19分 / 小学校高学年以上 / 1990年 / 文部省選定)

エチオピアの人びとと共に (17分 / 小学校高学年以上 / 1994年 / 文部省選定)

山岳ラオと共に (19分 / 小学校高学年以上 / 2002年 / 文部科学省選定)

★ 教育支援活動(世界里親会)について知りたい方へ

明日輝くために (17分 / 小学校高学年以上 / 1988年 / 文部省選定)

愛が実を結ぶ時 (18分 / 小学校高学年以上 / 1999年 / 文部省選定)

★ 日本国際飢餓対策機構の動きの全体について知りたい方へ

私たちの働き (21分 / 小学校高学年以上 / 2001年)

★ 2007年11月からDVD 2種、実費にて頒布予定

「世界の飢餓の現状と私たち(世界の子どもたち、隣り人の叫び、エチオピアの人びとと共に)」

「愛が実を結ぶ時(愛が実を結ぶ時、翔べアンデスの子よ、明日輝くために)」※各DVDに3作品を収録、頒布のみとなります。

◆ 貸し出しパネル

「飢餓について」「世界の食料問題について」「世界の水問題について」など、わかりやすく表した文字&写真パネルなどがあります。

◆ 国際児童画(貸出用)

バングラデシュ、ウガンダ、ペルー、ボリビアなど10数ヶ国で教育支援を受けている子どもたちが、毎年テーマに沿って描いたものです。2006年のテーマは「希望」。2007年は「私の大切なもの」



です。その他「遊び」「学校」「仕事」などが揃っています。各100枚前後。

◆ その他/カレンダー、書籍

● 国際協力カレンダー「地球家族」

世界6ヶ国の民間援助団体が共同制作しているものです。開発途上国の人々の暮らしぶりを、写真を通して紹介します。2007年度版のテーマは「コミュニケーション」。ペルー、バングラデシュ、中国、ガーナ、ニジェール、ベトナム、ケニア、ニカラグア、アフガニスタン、ボリビアの12枚の写真です。

26×36cm フルカラー 一部1,000円で頒布



● 絵本「ゴンドールのやさしい光」(日英対訳)

1985年のエチオピア大飢饉の際、スタッフが出会ったおじさんと、小さな女の子の交流を絵本にしたものです。本当の愛に気付かれます。

発行：自由国民社

絵：葉 祥明

文：みなみななみ

一冊1,600円で頒布

韓国語版、中国語版も出版。

またスペイン語版(DVD)もあります。



● まんがで学ぶ開発教育「世界と地球の困った現実」

主人公のみなみくんと一緒に、飢餓・貧困・環境破壊などの問題を学びます。

発行：明石書店

まんが：みなみななみ

編：日本国際飢餓対策機構

一冊1,000円で頒布



支援活動一覧

アジア	
バングラデシュ	25,604,286
世界里親会／ダッカ、マイメンシン（リシバラ、ハリジャンバリ）	11,432,048
グループ活動プログラム（ダッカ近郊ドゥムニ地区）	1,826,345
グループ活動プログラム（ゴノクトリ地区）	1,883,958
小児専門病院、小児治療センター（ダッカ） WFD	6,521,484
小児専門病院／粉ミルク支援	1,970,173
海外駐在／島 幸晴 支援	1,970,278
カンボジア	21,620,617
世界里親会／カンボット州チューク地区（クレイン・モデン村、トロピアン・ルーク村）、オドー・メンチェイ州アンロンベン郡（トゥール・サラ村）	6,136,401
地域開発プログラム（オドー・メンチェイ州アンロン・ベン郡） WFD	582,182
水・衛生プログラム（カンボット州チューク地区）	4,788,164
指導者育成プログラム（国内8州） WFD	657,033
海外駐在／木村力央・志保夫妻 支援	4,632,757
海外駐在／浜名基弘・マリヤ夫妻 支援	2,725,200
海外駐在／吉田真記 支援	2,098,880
フィリピン	458,567,051
世界里親会／マニラ近郊地区（フェアビュー、バリバラン、ビッグバナナ）	8,993,840
里子の奨学金	37,469
コミュニティ整備（バリバラン）	235,800
地域開発プログラム（マニラなど）	179,535
学校建設プロジェクト（ミンドロ島）	2,985,400
養鶏プロジェクト（ラグナ）	233,480
医療機器寄贈及びその輸送費（ナガ）	445,901,527
中国	11,123,563
雲南省・地域開発プログラム（ディーチン・チベット族自治州）	687,200
雲南省・竹芸指導者育成プログラム（昆明）	4,037,581
海外駐在／中上幸三・敏子夫妻 支援	3,636,620
海外駐在／星野公寛・尚子夫妻 支援	2,762,162
ウズベキスタン	2,016,172
障害をもつ子どもたちのためのデイクアセンター（ベカバッド）	299,225
海外駐在／小崎敏志 支援	1,716,947
アジア合計 518,931,689	
アフリカ	
エチオピア	13,327,842
農村自立開発プロジェクト（サシガ） WFD	7,976,600
農業プロジェクト（エネモル）	1,032,097
海外駐在／青山亜紀子 支援	2,266,169
海外駐在／高橋ゆかり 支援	2,052,976
ウガンダ	19,390,333
世界里親会／ブンタバ、ナマスンビ、キョガ、ミソンバ	13,587,042
拉致された子どもたち支援（キトゥグム）	3,166,904
エイズ・プログラム（カンバラ）	598,450
海外駐在／朝夷佳光 支援	2,037,937
モザンビーク	2,305,133
世界里親会／マロメウ地区ヴィラ	2,305,133
ルワンダ	8,949,061
「子どもだけの家族」支援（ギタラマなど） WFD	6,232,000
海外駐在／竹内 緑 支援	2,717,061
アフリカ合計 43,972,369	

支援活動一覧

中南米	
ペルー	14,313,874
世界里親会／リマ（ビジャ・ドス・デ・エネーロ）、プカルバ（ロス・プロセレス）	7,122,505
里子キャンプ支援（里親会関連プログラム）	392,268
指導者育成プログラム（リマ、プカルバ）	925,648
保健衛生プロモーター育成プログラム（リマ）	1,675,660
保健衛生プロモーター育成プログラム（プカルバ）	1,383,185
コミュニティ整備（プカルバ）	796,715
海外駐在／勢井美世 支援	2,017,893
ボリビア	9,359,331
世界里親会／チャヤ	4,338,387
農業プロジェクト（ラクコ）	995,917
海外駐在／河合朝子 支援	2,103,437
海外駐在／小西小百合 支援	1,921,590
中南米総計 23,673,205	
その他	
国際飢餓対策機構サービスセンターの働きのため	14,096,144
プログラム管理費	266,402
アジア・アフリカ・中南米／活動コーディネート費	175,110
「人づくり」フェロシップ支援	3,933,424
指導者育成プログラム	3,029,300
開発途上国全般の開発援助として	63,950,912
国際飢餓対策機構／台湾 設立協力金	50,000
海外プロジェクト担当／柳沢美登里 支援	3,458,069
海外駐在／森田哲也 支援（現在、米国留学中）	2,236,845
海外駐在／藤倉恵子 支援	268,897
その他合計 91,465,103	
海外緊急援助	
ジャワ島地震・被災者支援（インドネシア）	1,822,314
レイテ島地滑り災害・被災者支援（フィリピン）	709,680
チクングンヤ熱病・罹患者救済のため（インド）	622,250
緊急援助合計 3,154,244	
国内援助	
能登半島沖地震・被災者支援	1,210,892
阪神大震災・被災者復興支援（作業所「生活愛」のために）	633,200
国内援助合計 1,844,092	
支援合計 683,040,702	

*数字の単位は全て円です。

*現地駐在スタッフの支援金には、年金・海外旅行傷害保険などを含んでいます。

* **WFD** の印のついたプログラムの一部には、2006 年度の世界食料デー募金が充てられました。

収入の部

寄付金収入 (31.5%)
2億8,268万3,781円

[内訳]
一般寄付 2億6,299万6,557円
世界食料デー募金 1,968万7,224円

会費収入 (16.6%)
1億4,961万3,964円

前期繰越金 (2.4%)
2,182万4,677円

受取利息・雑収入 (0.4%)
325万9,033円

献品収入 [物資] (49.1%)
4億4,123万4,652円

8億9,861万6,107円

支出の部

事業費 (88.7%) 7億9,671万9,454円

内訳 ・支援総額 6億8,304万702円
 { 海外支援 [資金] 2億3,996万1,958円
 海外支援 [物資] 4億4,123万4,652円
 国内支援 184万4,092円

・教育啓発活動費 1億1,367万8,752円

8億9,861万6,107円

運営費 (9.1%)
8,156万9,044円

次期繰越金 (2.2%)
2,032万7,609円

*物資を除いた現金ベースでは17.8%

監査報告書

日本国際飢餓対策機構
理事長 堀内 顕 殿

私たち、監事 舟橋 弘 および 朝倉 章 の兩名は、
日本国際飢餓対策機構の2006年7月1日から2007年6月30日までの
第25期会計年度における収支計算書、正味財産増減計算書、貸借対照表を
監査いたしました結果、適法かつ正確であることを認めます。

2007年7月25日

監事 朝倉 章 

監事 舟橋 弘 

【支援者数内訳】

※ 2006年7月～2007年6月の募金受付分
※ 数字は個人・団体・グループを含みます

- JIFH 会員として 2,198 名
- 世界里親会会員として 2,452 名
賛助会員として 633 名
(里子数 2,712 名)
- 各海外スタッフ支援として 1,623 名
IVS 会員として 257 名
- 一般寄付者として 7,292 名



新しい国際協力体制に発展しました！

日本国際飢餓対策機構は、1981年、一人の日本人が、山森鉄直博士（元・国際総裁）の励ましを受け、インドシナ難民支援に参加。帰国後、パートナーを得て、日本で始めました。その後、1983年に、理事会をもつ組織団体となりました。

以来、国際飢餓対策機構（Food for the Hungry International）と協働して、40数カ国の協力団体と共に、自立開発協力、教育支援、緊急援助、海外スタッフ派遣、また国内での啓発活動等を行う広がりをもつようになりました。

国際飢餓対策機構は2006年、活動開始以来35年を経過し、新しく組織の変革を行いました。このなかで、各協力団体の理念が一層活かされるような共生的協力体制として、国際飢餓対策機構連合（Food for the Hungry International Federation）が立ちあげられました。この変革により、現地団体との共生的協力や他の国際協力団体との協力活動が、更に広がります。当機構は2006年12月からその一員となりました。

この新しい国際協力体制のもと、今後もアジア、アフリカ、中南米の最も貧しい状況の中で生きる方々の「こころの飢餓とからだの飢餓」に応える働きを進めていきたいと願っています。皆様の今の里子支援、各国支援は、更に積極的に、効果的に進められます。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

2006年

7月	島 幸晴（開発ワーカー）をバングラデシュへ派遣
	ルワンダ視察（神田総主事、田村スタッフ）
	ジャワ島地震被災地視察（酒井スタッフ）
	鍛冶嘉美、国内スタッフとして働きを開始
8月	第23回オリエンテーション・トレーニング開催（三重県）
	ワークキャンプ実施（フィリピン、ウガンダ、ペルー）
	竹工芸講師八木澤啓造氏逝去（中国での短期指導者）
	使用済みテレホンカード取り扱い終了
9月	竹内緑（プログラム・コーディネーター）をルワンダへ派遣
	第78回・定例理事会
10月	「世界食料デー大会」、9月～11月を中心に全国25ヶ所で開催。現地報告は古田真記（カンボジア）、河合朝子（ボリビア）、柳沢美登里（アジア）、奥村いずみ（元カンボジア）
	小崎敏志（世界里親会コーディネーター）ウズベキスタンから帰国
	小西小百合（世界里親会コーディネーター）をボリビアへ派遣
11月	仲島涼子、国内スタッフとして働きを開始
	インドネシア復興支援会議に参加（酒井スタッフ）
12月	クリスマス募金「開発途上国で働く海外駐在スタッフを応援してください」アピール

2007年

1月	愛知事務所開所式
	国際飢餓対策機構・韓国でのオリエンテーション・トレーニングに参加（清家総主事、田村スタッフ）
2月	カンボジア・チューク地区視察（神田総主事、奥村スタッフ）
	フィリピン・ミンドロ島視察（有江常務理事、仲島スタッフ）
	ボリビア・チャヤ地区視察（有江常務理事）
3月	春の特別支援「拉致された子どもたち（ウガンダ北部キトゥグム県）」アピール
	第24回オリエンテーション・トレーニング開催（千葉県）
	世界里親会・カンボジア里子訪問ツアー実施
	浜名基弘・マリヤ夫妻（プロジェクト評価、世界里親会アドバイザー）カンボジアから帰国
	能登半島沖地震のため緊急支援チーム活動
	神田英輔、定年退職で総主事から特命大使に就任
	富波貴志、国内スタッフとして働きを開始
4月	第79回・定例理事会（但し理事定数不足のため懇談の時となる）
	木村力央一家（カンボジア事務所代表）カンボジアから帰国
5月	能登半島沖地震／森祐理・親善大使 復興支援コンサート開催
	竹工芸指導者育成プログラム／中国雲南省昆明市にて実施（八木澤正・洋志、辻本顧問）
6月	柳沢美登里（国内外プロジェクト総主事）、田村治郎（開発・教育部総主事）、酒井保（緊急援助・特別活動担当課長）就任
	第80回・定例理事会、評議員会
	国際飢餓対策機構・韓国のチャリティマラソン参加（酒井・西本両スタッフ）

その他、機関誌「飢餓対策ニュース」12回発行（内、年次報告1回含む）

日本国際飢餓対策機構とは

【沿革】

日本国際飢餓対策機構（Japan International Food for the Hungry 略して JIFH）は、非営利の民間海外協力団体（NGO）です。1981年にひとりの日本人がインドシナ難民救援から帰国したのを契機に始まりました。

以来、国際飢餓対策機構（FHI）をパートナーとする他、国連諸機関、民間諸団体などと協力し、アジア、アフリカ、中南米の開発途上にある、約40の国々で「世界の飢えた人々に食糧と愛を」を標語に、物心両面の飢餓対策にあたってきました。

【日本国際飢餓対策機構の目指すものは…】

- * 人々が、生活の基本的必要に満たされ、自立することに協力し、
- * 自分の可能性を信じ、希望をもって生活し、隣人を愛する人になり、
- * 「分かち合い、助け合う」共生社会を実現することです。

このために、仕える者として国内外の支援・協力活動を行います。

【参加の方法】

支援活動の多くの部分は、会員の方々の定期的な会費や、随時の募金、募金箱によるご協力などで運営されています。

国内においては、講演会や勉強会、ビデオやパネルのご利用、世界食料デー大会などを通して、地域の方々と共に国内の啓発・教育活動にも取り組んでおります。

●会員形態

● JIFH 会員

飢餓対策の活動全般を、継続的に支えていただきます。

日本を含める工業先進国の飽食の暮らしぶりを見直し、何かを節約した中から、開発途上国の活動のために支援をいただいています。

毎月一口500円から。

●世界里親会

開発途上国の子どもたちが基礎教育を受けて健やかに成長していけるように、里親となって支えていただきます。

里子一人の支援につき、月額4,000円。

* 里親賛助会員

里子は指定されませんが、世界里親会の活動全般を支援していただきます。毎月一口500円から。

●海外スタッフ支援

各国で活動するスタッフの働き全般を支援していただきます。

毎月自由額から。

* 海外ボランティアスタッフを支える会（IVS）

スタッフを特定せず、海外スタッフ派遣の活動全般をご支援いただきます。毎月一口1,000円から。

●一般寄付について

「今回一度だけ」「定期的にはできないけれど、出来るときに自由額で募金したい」「特に募金の指定先はない」そのような場合の募金です。その時点で、一番必要のある活動に用いさせていただきます。

●指定寄付について

募金の使途先を指定していただけます。

●機関紙について

会員の方々へは、当機構機関紙「飢餓対策ニュース」をお送りいたします。機関紙の購読料は会費に含まれております。ご希望いただければ、賛同者の方々へもお送りいたします。

■顧問

泉田昭、岡村又雄、金子純雄、山森鉄直

■理事

堀内顕（理事長）、墨鉦平（名誉理事）、岸好美（副理事長／運営担当）、倉沢正則（副理事長／経理担当）、野武興一（2007年6月末まで、7月より顧問）、拝高真紀夫、木村雄二、丹波望（2007年3月末まで）、有江健（常務理事）、Randy Hoag（人づくりフェローシップ総裁）

※2007年7月以降に加わった理事として：

赤江弘之、崔信義、岩橋竜介

■評議員

工藤弘雄、田中隆裕、笠川徹三、麦野賦、千代崎聖子、比嘉幹房、田口博之、水野晶子

■監事

舟橋弘（公認会計士）、朝倉章（顧問税理士）

■海外スタッフ（2007年6月末現在）

【カンボジア】 吉田真記

【中華人民共和国】 中上幸三・敏子 星野公寛・尚子
八木澤正・洋志（特別講師）

【バングラデシュ】 島幸晴

【エチオピア】 高橋ゆかり 青山亜紀子

【ルワンダ】 竹内緑

【ウガンダ】 朝夷佳光

【ペルー】 勢井美世

【ボリビア】 河合朝子 小西小百合

【派遣準備スタッフ】 斉藤満（カンボジア）

【海外プロジェクト担当】 柳沢美登里

【米国留学中】 森田哲也

■職員（2007年6月末日現在）

【開発・教育部】

東京 神田英輔（3月末まで総主事、4月より特命大使）、辻本清臣（特別顧問）、柳沢美登里（6月より国内外プロジェクト担当および東京事務所管理総主事）
須山弘子（主任・東京事務所管理補佐）
半田智英子、石田敏隆、奥村いずみ

沖縄 太田留美子

広島 田村治郎（6月より総主事）、千代崎満子

大阪 酒井保（6月より緊急援助・特別活動担当課長）

【国際協力隊】 ※すべて大阪

清家弘久（総主事および愛知事務所担当）、松島育子、山本和弘

【世界里親会】 ※すべて大阪

有江健（総主事兼任）、橋本江里子、仲島涼子、西川和子
浜名マリヤ、長久愛子

【事務部】 ※すべて大阪

有江健（総主事兼任）、高橋献一（主任：会計担当）、西本玲子
鶴浦弘敏、西川真一、鍛冶嘉美、富浪貴志、中井佐起子

※2007年7月以降に加わったスタッフとして：

伊藤えみ子、向頭要一、藤谷誠、申玉徹